



酒田市 飛鳥から見た鳥海山

色彩際立ち 心晴れ渡る 夏の庄内

 庄内銀行

Cradle 7

「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2015 July/August
平成27年7月1日発行(毎月奇数月発行)第5巻8号(通巻30号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株式会社 出羽庄内地域デザイン) 電話0236(64)0888
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コアック・コーポレーション」 電話0234(41)0012

美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
庄内「夏」
写真季行
庄内憧憬
赤坂 憲雄 民俗学者

「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

7

2015 July/August
TAKE FREE
NO.30



夕づの島の美しい夏を思いだす。
島と山が結ばれる。
同じ季節がすぐそこにある。

島の人生に触れた夏 赤坂憲雄

飛島には、少なくとも三度渡っている。一九九〇代半ばのことだ。いくつかの記憶が交錯しながら、しかし、ひとつひとつの場面はとても鮮やかだ。手を伸ばせば届きそうな気がする。島の風景は大きく変わっていることだろう。

はじめて遊佐の友人と島を訪ねたのは、ある夏のことだ。デッキの上から、遠ざかる鳥海山をいつまでも眺めていた。この海のどこかに、父は沈んでいる、と友人は遠い眼をして呟いた。幼い日、嵐であったのか、船長をしていた彼の父は還らぬ人となった。火合わせの神事に立ち会うことができた。飛島と遊佐の浜辺と鳥海山とを、火をもって繋ぐ古来よりの宗教行事である。

その何年かあと、学生たちと四五日滞在して、島の人たちの人生に触れて歩いた。探検と称して、ひたすら島のあちこちを歩きま

わった。やはり、七月半ばで、トビウオ漁が行なわれていた。法木の港には何度も通った。トビウオ漁や磯見漁について、そこに生きられてきた小さな人生について、聞き書きすることができた。

島での先生は本間又右衛門さんであった。何冊かのご著書をもつ郷土史家であったが、夜になると、学生たちと本間さんを囲んで、島の歴史や文化について伺った。若い頃に、島を訪れた民俗学者の宮本常一を案内してまわったことがある、という。宮本が離島振興法を作るために尽力していた時期のことだろう。宮本自身が瀬戸内海に浮かぶ、周防大島の出身であったから、島が自立的に、内なる力に支えられて発展することを願った。宮本の教えは本間さんを支え、たにちがいない。

本間さんの訃報に接したのは、いつであったか。思い出せない。

十二月はじめ、線香をあげるために二人の学生と島に渡った。海は荒れていた。夏には賑やかだった通りに、人影はなく、家々は閉ざされていた。冬場は酒田の方の家で暮らしているのだ、という。夏の聞き書きでは誰も触れなかった。こちらが聞かなかっただけのことだ。帰りの船に乗り込もうとして、背後から呼ばれた。娘さんであったか、ビール瓶に詰めたイカの塩辛を手渡されたのだった。

鳥海山・飛島ジオパーク構想が動き出しているらしい。何年前かに、磐梯山をジオパークに登録するための活動に少しだけ関わったことがある。ジオパークはいわば、自然と人間がやわらかく共生してゆくために、その地域の自然環境を学びや観光とからめつつ整備活用し保全することを目指すものだ。夕づの島の美しい夏を思いだす。島と山が結ばれる。同じ季節がすぐそこにある。



鳥海山火合わせ神事／小物忌神社(酒田市飛島)

あかさか・のりお／民俗学者、学習院大学教授、福島県立博物館館長、遠野文化研究センター所長
1953年、東京都生まれ。1992年より東北芸術工科大学助教授、1996年同教授、同東北文化研究センター所長。東北地方のフィールドワークを通して、その視座から日本文化論を見つめた「東北学」を提唱。震災以降の記録をまとめたものに「3.11から考える「この国のかたち」東北学を再建する」がある。その他、著書多数。

特集

Special Edition

庄内夏 写真季行

春を望み、夏をたのしみ、秋を慈しみ、冬を尊ぶ。
私たちはめぐる四季の中で、日々、自然を感じて暮らしています。
山、里、海。多様な自然を被写体にして
5人の写真家が見つめた、庄内の夏。そのまなざしを受け取って、
私たちはこの夏、どんな時間を旅するのでしょうか。

鶴岡市大山の上池にて。毎年、盆前の8月10日と11日は地元の浮草組合員が舟を浮かべ、蓮の花を採る。
写真＝太田威（2007年8月11日撮影）



「ブナの葉が生い茂って森を覆う夏は、太陽光が地面まで届きにくいため、花との出会いは意外と少ないんです。ところが、葉緑素を利用しないシヨウキランがひっそりと咲いていたりする。だから、夏の森は思いがけない出会いの季節ともいえるでしょうね」。

鳥海山を主なフィールドに、30年近く写真を撮り続けている斎藤政広さん。鳥海山のガイドも務めるため、多い時は週に3〜4回登ることも。そのたびに新たな出会いや発見を重ねています。

出羽富士とも称される東北の名峰、

①大平登山口付近のブナ帯に暮らすエゾゼミ。ちっちゃな体で大きなブナの木を上ってゆく。②鳥ノ海(鳥海湖)と鍋森。御浜付近。高山湿地ならではの多様な植生も魅力的。③高山帯の雪渓わきなどに生息する花、アオノツガザクラ。夏の出会いは驚きに満ちて。④雪解け水がせせらぎとなって流れ始める頃からは、美しい花の季節の始まり。⑤チングルマとハクサンイチゲの花畑が広がる笠ヶ岳。澄んだ青空に残雪の新山が映える。

長野の白馬村で山小屋の手伝いをしながら北アルプスへ。その後、縁あって酒田で暮らし始めてから東北の名だたる山々を登ったものの、いつしか鳥海山のブナ帯に足が向くようになったのだとか。「冬芽の鱗片が残雪の上に落ち、芽吹きが始まる風景はとてもドラマチック。四季ごとに多彩な変化をみせてくれるブナの森は被写体として魅力的ですね」。

食物連鎖の頂点に立つイヌワシが息し、バランスのとれた生態系が保たれているとされる鳥海山。保水力の高いブナの葉は腐葉土となり、蓄えられたミネラル豊富な水は栄養豊かな海を育みます。「約束は守られ、森は創られていく。そして森自体が生命体となる(『ブナの声 VOL.24』より抜粋)」。

政広さんのファインダーで捉えられる美しい一瞬。それは、森の生命を見つめてきた政広さんだからこそ写し出せるものなのかもしれません。

文 土門 かり

鳥海山。対馬暖流の影響で裾野にはタブの木などの照葉樹林、その先にはミズナラの広葉樹林、さらに上にはブナ帯が広がり、生息する植物や生き物も多種多様です。また、日本海側からの湿り気の多い雪が季節風に流され、山の南東面に回りこむことで形成される雪渓の多さも鳥海山ならではの「残雪の中にチングルマやハクサンイチゲの花が咲き始めたなら、10日後にはニッコウキスゲの群落に変わるなど、鳥海山の植生は変化に富んでいます。気候や時



庄内 写真行 Special Edition
横浜市生まれ。酒田市在住。鳥海山のガイドや登山用地図の執筆も手掛けるほか、「鳥海山にブナを植える会」の活動にも関わる。今春、写真集「ブナの声」Vol.24を刊行。

あふれる生命力に魅せられて 斎藤 政広さん

間帯、雲の流れなども考慮しつつ、これはと思える一瞬を捉えたいですね」。政広さんが写す生き物や花々は自然体そのもの。写真からは被写体への優しい眼差しが感じられます。「常に虫たちの視線や気持ちを感じながら撮れたらいいなと思っています。被写体を見つめているうちに、モデルになってくれているなど感じる瞬間もあるんですよ」。

幼少の頃から生き物が好きだった政広さん。中学で昆虫クラブを立ち上げ、北アルプス登山を経験。そして初めて平地と違う山の生命があることを知り、その魅力に引き込まれました。就職後も山への思いから退職し、





2

ますよ」。

小さな生き物を中心に自然写真を撮りためている畠中さんが写真を撮るようになったのは、生物部に所属して、標本の虫を採集するために庄内平野を自転車で走り回っていた高校時代。鳥海山麓の杉林でアサギマダラに出会ってからでした。「この蝶は、夏になると南の方から飛んでくるのでよく見るものなのですが、この時は風のな



1

い杉林の中を木漏れ日を浴びながらフワフワ飛んでいたんです。それがとてもきれいで。以来、瞬間的にうわっと

忘れられない 庄内の夏の光景

畠中 裕之さん



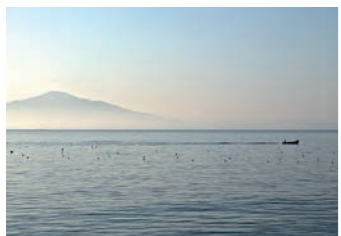
遊佐町在住。山形県自然公園管理員、山形県希少野生動物調査会、遊佐町鳥海山観光ガイド協会、公益社団法人日本山岳ガイド協会認定登山ガイドステージII。鳥海山などの山や自然の案内人。

あふれる感性で、庄内の自然の魅力をわかりやすく伝えてくれる畠中さん。でも実は、一番好きな夏の風景は、子どもの頃にカブトムシを捕まえにいった鳥海山麓の藪だそう。「本当にただの藪なんです。自分にとっては忘れられない原風景なんです。そういうものって誰にでもあると思うんです。それってもしかしたら何かの拍子に周りにはなくなっていて、とても大事なものになっていくかもしれない。それを考えると、個人にとって大事な風景だけは皆さんも忘れないでほしいと思います」。

①鳥海山の外輪にて。飛んでいるアサギマダラは、毎年夏になると九州や南西諸島からわたってくる渡り蝶。②ほぼ鳥海山の湧水という清流・牛渡川。梅花藻の間からニホンアカガエルが顔をのぞかせている。③天気がよい日は、飛鳥から鳥海山が海に浮かんでいるように見える。④アオスジアゲハが鳥海山の湧水が砂浜から湧き出る釜磯海岸に水を飲みに来たところ。⑤三崎公園のスカシユリ。この辺りの海は飛鳥に負けないくらい美しいと畠中さん。

心動かされた光景は写真で残すようになりました」。花や虫など被写体に関係なく、畠中さんの写真にどこかロマンを感じるのは、その時々々の撮り手の感動が映し込まれているからかもしれません。

広い見識と動植物への愛情、好奇心



3



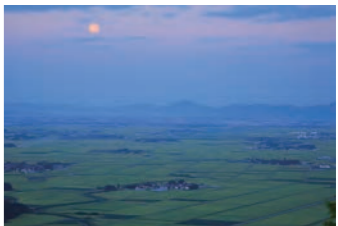
4



5

「私が好きな夏の風景は、鳥海山の上で寝転がってのんびり眺める景色です。それと飛鳥。ブラブラ島を散歩しながら見る港や海の景色が好きですね。吹浦周辺の釜磯海岸や牛渡川、丸池様も、幼少期に過ごした場所なので思い入れがあります」。そう話す畠中裕之さんは、鳥海山をフィールドに、海、山、川と庄内一円を幅広く案内してくれる自然ガイドのプロフェッショナルです。

遊佐町生まれの畠中さんは、幼い頃から「虫好き」で、高校卒業後は本格的に生物を学ぶため青森県へ進学し、主に東北の山々で活動しました。その後、東京に拠点を移し、番組制作会社のスタッフとして国内外へ。26歳で庄内へ帰郷します。「そうやって若い時に外でいろいろ見てきたので、庄内の自然の面白さがわかるようになりました。例えば、私が子どもの頃によく遊びに行っていた牛渡川にしても、家からすぐ近くに顔をつけて飲める川があるなんて、すごいことです。世界を見渡せば、雑菌だらけで手足を入れられない川や、水が枯れてしまった川もありますから。鳥海山にしても、山の上で高山植物の写真を撮ると、その背景に海岸線と海が映る山は、そうそうありません。日本海に影が映る影鳥海の写真も、県外の人に見せるとどよめき



「大滝にんじん」の白い花や、大人の背丈の倍以上に茂った「外内島きゅうり」のつる、「田川かぶ」の種まき前に行われる焼き畑——。庄内をはじめ

県内各地の在来作物を撮り続けている東海林晴哉さんの写真からは、夏の強い日差しを浴びて成長する作物の力強さと輝き、それらを育む生産者の温かなまなざしが伝わってくるようです。

「真夏のお盆の時期に、下草や雑木を刈り払い、火を放って焼き畑をする大変さは、撮影していても十分に分かります。また、暑さや病気に弱い内外島きゅうりが支柱を覆い尽くすまでに茂った姿は、美しい緑のトンネルのようです。生産者の皆さんは『昔からそうしてきた』と当然のように言うけれど、私にとっては圧倒される光景です」と、目を輝かせます。

東海林さんが長年撮影を続けている「焼き畑」は、急斜面の山肌を焼くことで土壌を殺菌し、成長に必要な養分

①種採り用に栽培された鶴岡市日枝の在来野菜「大滝にんじん」の花
②「田川かぶ」の焼き畑の作業
③明け方の空に月が浮かぶ庄内平野。朝の真新しい光は条件が揃った時にだけ撮影できる。
④「根粒菌」が根にびっしり付いた「だだちゃ豆」。枝豆の生育に欠かせない窒素を作る役目をする根粒菌の量がおいしさの証拠
⑤焼き畑で「田川かぶ」を作り続ける長谷川喜三さん、久子さん夫婦。種まきから収穫、種取りまで地域内で一連の作業を繰り返している。

在来作物の撮影の一方で、東海林さんは、月明かりに照らされた庄内平野の水田など、月の満ち欠けと稲の成長を追った風景も撮りためています。満月の夜に、鶴岡市や酒田市郊外の見晴らしのいい場所に出かけては、物音一つしない風景の中でカメラを構えます。ほのかな月の光が映し出す幻想的なその写真は、地元の人たちにも驚きや発見をもたらしてくれそうです。「庄内には、特別に珍しいものがあるわけではないかもしれませんが、例えば股の下から逆さに見た風景が新鮮に見えるように、ちょっと探せばまだまだ面白い風景が見つかるはず。誰も知らないような風景を探して、ドキドキしながら撮影するのが楽しいんです」と、少年のような笑みを浮かべる東海林さん。ある時はただちや畑のすみっこで、はたまた金峯山の山頂で、ドキドキを探して縦横無尽に歩き回るその姿は、子どもの頃の心象風景を追い求めているのかもしれない。

文 今野里香

を補い、発芽を促すなどの目的で行われてきた伝統農法です。火気を伴うことから、風向きによっては煙に巻かれてしまう危険性もあり、たとえ何十年来のベテランでも毎回気をつかう、真剣勝負の作業です。その張りつめた空気の中に部外者が立ち入ることは容易ではなく、東海林さんは当初、気後



夏 庄内
写真 季行
Special Edition

遊佐町出身、鶴岡市在住。測量技師の傍らで写真を撮り続け、37歳でプロの写真家に転身。山形県内の在来作物を撮影した作品を発表している。山形在来作物研究会会員。

胸が高鳴る瞬間を 追い続けて 東海林 晴哉さん

れして体が思うように動かなかったといえます。それでも一年、また一年と撮影を重ねるうち、炎が山肌を走る緊張感に包まれる中で、生産者が時折見せる親近感や、安堵の表情をとらえる機会が増えていきました。たとえ効率的ではなくとも、先祖からの味を絶やすまいと、手間ひまかけて栽培を続ける生産者の姿。撮る側と撮られる側という立場はいつしか超えて、食が生まれる風景を共有しているという実感に、いつも元気をもらっています。





1

「海の中はいたるところにドラマがあつて、生きものたちが体を張って仲間を守っていたり、お互いにうまく共生していたり、その姿に教わることがたくさんあります。僕は、彼らの『色』にこだわって、そのドキュメンタリーを撮っているんです」。昔から人は海や空に憧れ、その場所へ足を踏み入れたい気持ちに駆られてきました。鶴岡市のダイビングショップ「アーバンスポーツ」オーナーの相星克文さんは、かつて海上自衛隊の水中爆発物処理チームに所属し、その後も機動隊や水難救助隊などの潜水指導を務めてきた現役のテクニカルダイバー。厳しい海と対峙する一方で、広く深い海の楽しみを多くの人に伝えようと、色彩豊かで美しい海の中を撮り続けています。相星さんの写真に多く登場するのは、大きな海の小さな住人たち。数ミリ、数センチほどの彼らが、しっかりとカメラ目線で写る姿には思わず笑みがこぼれます。『撮るの？』って聞いてく

①7月の加茂。メバルが泳ぎ、マアジが群れで泳ぐ。②「ダンゴウオ」は寒い水を好む北方の魚。この稚魚は大きさが5ミリほどで、海藻のアオサに乗る姿はまるでチューブライディング。③「ギンボ」の仲間は愛嬌のある顔でダイバーの人気者。④扇風機のように見える背景はクラゲの体。そこにくっついて生活する「ウミノミ」は「クラゲライダー」。⑤「ウミノシ」は、貝殻が退化または消失した巻貝の仲間。カラフルで種類が多く、写真を撮り集めているダイバーも多い。

るみたいは僕のほうを見るんです。小さな生きものを撮り始めたのは、広い画を撮ろうとすると、海の中ではどうしても青と黒の世界になってしまうんですね。でも、ふと視線をすぐ前に向けてみたら、たくさんの色があつた。彼らを見るたび、小さい体で生きてるんだなあって感動します」。

相星さんが水中写真を撮り始めたのは、岩手県から庄内に移住した21年前。庄内の海の前。案内役になるために、いつ、どんな生物に会えるのかを知らうと、撮影調査を開始。当時はまだ水中写真はマイナーな時代で、機材も不十分、失敗したら翌日再び潜り、

時季を逃したらまた来年と、ひたすら撮り続けたといいます。いつの間にか写真は膨大な数に。それは庄内の海の四季を網羅する貴重



My favorite scenery
夏 庄内 Special Edition
写真 季行

ダイビング教育機関PADI(米)および、IANTD(米)、IART(欧)所属インストラクター。近年は世界最新の機材を日本に導入、教育の第一人者となっている。

多様な生命が彩る 海の中の記録

相星 克文さん

「海の中は僕らにとってアドベンチャーの世界ですから、一期一会の瞬間の連続です。中には顔なじみになった魚もいて、加茂のマダイのコロ助、四島のコブダイの金次郎は僕が勝手に名づけ



2

たんですが(笑)、海に入ると向こうから近寄ってきてくれます。ああ今年も会えて良かった、元気で生きてほしいなっていますね」。

海の中の四季を生きものたちが教えてくれる、と相星さん。庄内の海が最もにぎわうのは南北の魚が入り混ざる秋口。この春に庄内で生まれた子どもたちも大きくなって、私たち海のビジター(訪問者)を迎えてくれます。



4

5



夏になると、水面が蓮の花で埋めつくされる鶴岡市大山の上池。夏の風物詩としてよく知られる景色ですが、蓮はかつて上池ではなく、大山公園を挟んだ下池に自生していました。上池の畔に家を構える太田威さんは話します。「蓮池は20年くらいのサイクルで上池と下池が入れ替わってきたんです。それは私が50年もここで二つの池を見続けてきたから分かったこと。他に気づいた人はいないと思いますよ」。

満州で生まれ、2歳で大山に戻った太田さん。二つの池は子ども時代、友だちと泳いだり、足を泥だらけにしな

写真はすべて鶴岡市大山の蓮池にて①2009.8.10②1991.8.27③水面に映る蓮。2009.8.18④1991.8.26⑤浮草組合員による蓮採り。1992.8.10
大山の浮草組合は江戸安政年間以前から続く歴史ある組織。現在は40数名の組合員で構成され、毎年盆前に花と蓮の葉を採取、9月中旬にレンコンを採り、主に酒田へ出荷している。このレンコン採りはかつて、池に直接入って採っていたが、現在は舟の上から棒で引っ掛けて採る方法へと変わった。

知らないでいると、とんでもないことが起きてしまう。そして今、それが実際に起こりつつありますからの」。

20年周期という大山の蓮池も、その交替時期がとうに過ぎたはずなのに、入れ替わらないと太田さんは話します。下池と上池に飛来するマガモの数もかつては6万5千羽いたのが、今は2万羽ほど。近隣の山々に生息する虫や鳥、小動物もめっきり姿を見せなくなったりとか。「自然はもともと分からないことだらけだけど、やっぱり温暖化による自然環境の変化が大きな原因だと思っています。しかもその変化は年々加速している。今、新たな本の出版に向けて資料をまとめているところだけど、今後のことを考えると、私が書き伝えなければいけないことは、まだまだあると感じています」。

大山の静かな池畔で、執筆に勤しみながら自然の行方を見つめ続けている太田さん。7月中旬を迎える頃、上池には鮮やかな蓮の花が咲き始めます。

がら蓮の実を採って食べたりと、格好の遊び場でした。中学生になると浮草組合の一員として蓮池のレンコン採りに仲間入り。高校生になると、池に飛来する野鳥の姿を写真で撮り始めました。そして全国的にブナ林の伐採が進んだ高度経済成長期、太田さんは朝日連峰や白山山地のブナ林を守るため、日本自然保護協会や地元の人たちと大規模な反対運動を展開します。「このままじゃ危ないと感じたのは、20歳頃。それからずっと自然を守る運動を



鶴岡市大山在住、自然写真家。専門は自然保護と自然観察。日本野鳥の会、尾浦の自然を守る会。著書は『ブナの森』(平凡社)、『水鳥たちの楽園』(そうえん社)など多数。

生態系の繋がりを 見つめ続けて 太田威さん

してきました。結果、ブナ林の伐採が弱まって、最終的には切らなくなったわけだから、あれがなかったら今頃はもっとひどくなっていたはずです」。

同時に、最初は野鳥だけだった被写体が、花や虫、木、森、川、海へと拡大。フィルターを通してさまざまな自然の姿を見つめ、撮り続けました。そして昭和58年には森林研究をまとめた『ブナの森の四季』を出版。以来、次々と著書を世に送り出し、自然の大切さを訴えています。「虫も花も

人間も、みんな生態系の中で育まれ、生きていますからの。その繋がりを見えないと物事は見えてこないし、





酒田の むきそば

サラサラ、ぶつぶつ
皮をむいて茹でたソバの実に
冷たいダシ汁をたっぷりかけて
すするようにいただく、酒田の夏の味

晩酌のお供に、宴会のシメにと、酒田では夏に向けて、料理屋を中心にあちらこちらで重宝される食べものがある。皮をむいたソバの実に、冷たいダシ汁をかけて食べる「むきそば」だ。

ルーツは江戸中期、関西地方の寺院で精進料理として食されていたのが、北前船で酒田に辿りつき、料亭で御膳に出されたことによる。昭和の戦後、地元のソバや米を粉にして販売していた梅田製粉の社長が料亭で宴席を楽しんでいたところ、むきそばに出会い、商品化を提案。ソバの皮を一粒一粒むいて販売した。その後、機械で皮をむくようになり、5月の酒田まつりや夏のごちそうとして普及。平成元年、すぐ食べられるようにと、茹でたむきそばの実とダシ汁の缶詰をそれぞれ発売すると、遠方に暮らす人たちにも重宝され、贈答用としても喜ばれるようになった。

具はシイタケと鶏そぼろがポピュラーだが、普通の蕎麦と同じようにトロロや天かすなど何でもOK。小振りの器に盛った白い粒々と冷えたダシ汁をスプーンでズルズルと流し込めば、夏バテにも飲みすぎて弱った胃腸にも心地よく染み渡る。

しかし、縄文時代に栽培が始まったという長い長いソバの歴史の中で、今私たちが当たり前前に食べている蕎麦切りは、江戸時代に普及したものだという。それならソバの実をそのまま食べるむきそばは、古くは一般的なものだったのだ。ちなみに徳島県には、皮をむいたそばの実を、お米代わりにする「そば米雑炊」があるという。調理法やルーツなど異なるところもあるようだが、遠い地にある徳島が、何だか身近に思えてきた。



梅田食品の主な製品は、皮をむいたソバの実(袋詰め)、煮たむきそば(缶詰)、薄めずそのまま使える専用のタレ「そばたれ」(缶詰)。タレは、梅田食品が以前から仕入れているかつお節と昆布でダシをとっている。無添加自然食品。贈答用の缶詰セットもある。右の写真は、缶詰のむきそばとそばたれに、トロロ+ウズラの卵、シイタケ+鶏そぼろの組み合わせ。

梅田食品製造本舗 ☎0234-26-4070



白山風露

先を急ぐことなく一歩一歩、花たちに声をかけ歩く。木道の途中から頂上へ続

て出会うことのない風光だ。

再び、月山の頂上を見上げながら、木道を歩き始める。足元に目を移せば、可憐な花々に心が洗われる。そっと咲く鴉草や岩銀杏、池塘には河骨、時折、弥陀ヶ原一面に通り道をつけて風が走る。風に揺れる綿菅、控え目に咲く雛桜、眩しいばかりに日の光を受けながら、背伸びをする日光黄菅。残雪が解けたばかりの水辺には水芭蕉が咲く。山の上にこんな世界があったとは。ここまで来なければ決して出会うことのない風光だ。

内平野、光を敷き詰めたような日本海。遠く沖には飛鳥島を望む。そして、遙か蒼い空に浮かぶ鳥海山を目にした時、普段、月山を仰ぎ見て暮らしている私は、実はこうして月山にいつも見守られているのだと気づく。

夕菅や遠く光れる沖つ島 — あべ小萩

く道を進むと、四葉塩釜や稚児車など、弥陀ヶ原では見られなかった花が次々と現れる。冬は想像を超える雪に覆われながらしっかりと根付き、短い夏に毎年花を咲かせる。厳しい自然の中で、健気にたくましく生きる姿は凛と美しい。

夏雲をくばる池塘のそれぞれに — あべ小萩

さつきまで晴れていたかと思えば、一面あつという間に霧に包まれた。緑が深みを増す今、自然の姿は最も活発な時期となる。自然の美しさと厳しさを象徴する高山植物の存在は、夏山を清らかな命の輝きで満ちあふれさせる。また、花々の背景に見る雪渓や峰、そして刻々と変わる空の表情は崇高な自然美を映し出す。

出羽三山の中でも、月山は死の山といわれ、修験者は山に入り、死とよみがえりの修行を行う。修験者でなくてもこの山を訪れると、心の動きも体の働きも目覚めるような気持ちになる。清く美しい花たちに出会おうと、またここへ来て自分を見つめ直したくなるにちがいない。

うぐひすの呼応のひまを水いそぐ — 上田五千石

写真・文|| あべ小萩(月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員)



弥陀ヶ原の池塘

庄内俳句紀行

天空のお花畑 月山弥陀ヶ原を歩く

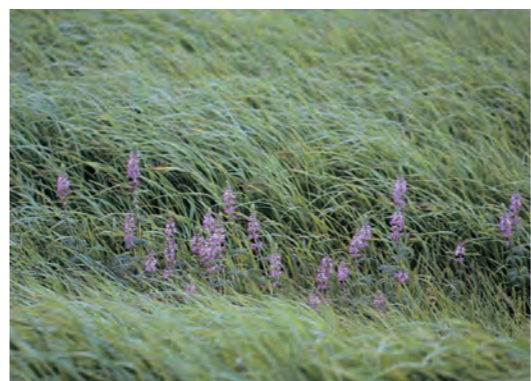
鳥海山、月山の雪渓が日に日に小さくなり山の緑が一層深みを増す頃、山の上では色とりどりの高山植物が、短い夏を彩る。それはまるで、天空の世界の楽園のようである。

季節語
お花畑
(おはなばたけ・おはなばた)
夏の季節語。高山植物が群れをなして咲いている場所をいう。

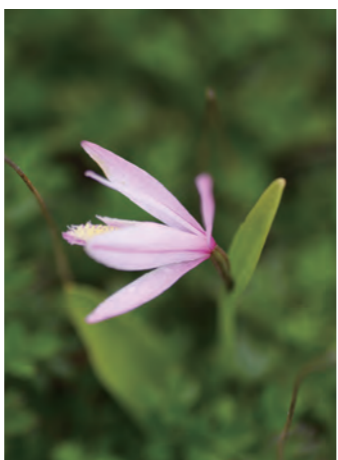
かな丘が広がり、風に誘われるように歩を進めた。

月山に速力のある雲の峰 — 皆川盤水

弥陀ヶ原には池塘が点在する。そこに映る雲と目の前に広がる空を見ていると、自分がまるで天空の世界にいるような錯覚に陥る。今来た木道を振り返り、思わず息をのんだ。眼下に視野をあふれる庄



風の通り道



鴉草



雛桜